

溝口 春翠（みぞぐち・しゅんすい）

1、プロフィール

詩人。「文庫」をはじめ中央雑誌に作品を発表した。20歳で世を去ったため作品数も少なく、無名のまま終わったが、青森県の新体詩人の先駆者と言うことができる。

<生没>

1879(明治12)年1月28日 ~ 1898(明治31)年12月7日

<代表作>

『溝口春翠詩文集』

<青森との関わり>

三戸郡三戸町に生まれる。三戸小学校卒業後家業の呉服商に従事しながら、中央の雑誌に詩文を発表した。

2、作家解説

明治12年1月28日三戸郡三戸町に6人兄弟の長男として生まれる。三戸小学校尋常科卒業後家業の呉服商に従事しながら、文学的活動を続ける。明治28年「少年世界」第1巻第7号に「あはれ春風」「観祝捷運動会記」の二文を本名溝口正八で投書、掲載された。春翠16歳の時である。これをはじめとして、「少年文集」「小文庫」「文庫」等、中央の雑誌に新体詩を中心として、小説、文、和歌などの作品を次々と発表していった。

特に「文庫」については、明治28年8月の創刊号から同31年11月の第10巻第6号まで、すなわち亡くなる1ヶ月前まで春翠が最も多くの作品を発表している。初期に活躍した詩人として名を挙げられ、注目されていたのがわかる。

明治31年11月下旬春翠は上京して「新声」の記者となる。しかしわずか2週間にして病を得、帰郷。間もなく二十歳の若さでこの世を去る。最後の新体詩「片

山家」が「新声」第1巻第1号に掲載されたのは、1ヶ月後の明治 32 年1月のことである。

大塚甲山は追悼文の中で、「只君ひとり絢爛たる詞華を揮ふて一道の光明を放ち吾輩をして将来大に吾文壇に濶歩するの期あるを期せしめし」と述べている。あまりに短い生涯のため作品も少なく、無名のまま終わったのであるが、青森県の新体詩の先駆者として、溝口春翠が残したものは大きい。

なお、春翠の妹つぎ(明治 14 年 10 月 21 日～昭和 26 年6月 12 日)も「少年文集」「文芸倶楽部」に新体詩を発表している。また弟の良平(明治 24 年1月 13 日～大正元年9月 10 日)は「白河夜舟」「溝口無韻」の筆名で「文章世界」などに俳句、短歌、文を発表している。いずれも春翠の強い影響をうかがうことができる。

参考、「新体詩人溝口春翠—その生涯と作品」小山内時雄

3、資料紹介

○『溝口春翠詩文集』

図書

1976(昭和 51)年3月1日

225mm×180mm

明治 28 年から 32 年までの4年間に発表された作品を収めている。新体詩 80 篇のほか、小説4、文5、和歌 29、俳句2を含む。

小山内時雄編。226 ページ。